

氷上におつ倒れて束の間の安息を味わうのだった。対岸まで一キロの茫漠たる氷原に、刺すような寒気に耐えながら過ごした。この無我の一刻が今に忘れられない。この氷塊は付近の農村の夏の飲料水に使われるということであつた。

長い冬から覚めたウクライナの春が足早にやつてきたある休養日、思いがけない収容所の運動会が日独共同で開かれた。ドイツ側は走高跳びや、幅跳び、あるいは三段跳び、百メートル競争など陸上競技に続々と出場し、ベニヤ板でつくった手製ギターをかき鳴らしながらの応援ぶりは、日ごろの暗さを吹き飛ばす盛り上がりようである。

彼らの歓声に比べ、片や日本側は意気さっぱり上らず、広場の片隅で軍隊式体操を一通りお目にかけて程度で、あとは先方の競技を観戦するのみ。体力の減退から当然のこととはいえ、同じ抑留の身ながら民族的な意欲の格差を見せつけられた一日であつた。

それ以来、彼らとの間に交流も生まれ、寝所を訪ねて、ドイツから届いた家族の写真を貼つてあるはがき

を見せてもらつたりして、言葉は通ぜずとはいえ、親しみを増していった。ベルリンのオリンピックに出た日本選手の名を覚えていて、平泳ぎで競つたというドイツ人もいて、久しぶりに和やかな気分を味わつた。やがて、待ちに待つた「ダモイ」の日が来た。また残つてゐるドイツ人たちと「アウフ ヴィダー ゼーエン」(さよなら)の握手を交わし、三十五人の友を葬つた墓地に遙拜して、歓喜を満載した帰還列車は再びウラルの山脈を越え、一路東方へ向かつた。太く長い黒煙が原始林の彼方に消えていった。

祖国は遠かつた

岩手県 西野津 一

昭和二十年八月二十九日、武装解除させられた私たちは音徳爾(イントール)の町はずれの草原でトタンや板を集めて小さな小屋をつくり、気の合つた者が三、四人で暮らしていた。毎日帰国を楽しみに、小屋の修

理、食べ物とまき探しに明け暮れていたが、日本には船がないため帰れないとうわさが流れ、九月も過ぎ、秋深くなった十月の下旬に音徳爾（イントール）を移動することになった。

ウラジオストクが十一月までは凍らぬそうだと、いかにも帰国を意味するよううわさも流れていた。夢に見た故国に帰れるうれしさに戦闘での疲労も忘れ、重い荷物を背負ってソ連兵に「ピシトラ（急げ）ピシトラ（急げ）」と言われながら歩いた。歩行中も時計とか万年筆等ソ連兵に取り上げられた。私の眼鏡を取ろうとしたので、私は思わず大声をあげて制止した。ソ連兵は慌てて逃げて行った。

ソ連兵は日本人の叫び声と力強い足音には怖いらしい。後日ソ連に入ってから朝作業に行く途中、だれかふざけて「歩調を取れ」と号令した、皆でザクッ、ザクッと歩調を合わせると、先になっていた警戒兵が驚いて銃を担いでとんで行ったのには大笑いした。休むことなく歩かされて、着いたところは駅のない、あるいは駅の外であろうか、線路の上には馬などを運ぶ貨

車が並べられている。貨車は二メートルの入り口の引き戸を中心に左右を荒板で上下二段にして、多く乗れるようにしてある。貨車の一面に上三十人くらい下五十人くらい詰め込まれ、足の踏み場もないほどだった。入り口の引き戸の側に軍隊の梅干等が入っていたようなたるが一個、置いてあって、それが車内八十人の小便用である。

足の踏み場もないほど詰め込まれた間を分けて目的のたるまでたどり着くのも苦労だが、たるのそばの人は大変だ。安眠を妨げられる上に貨車の揺れが激しいときなどは、おこぼれをいただくことがある。暗やみの中で踏まれて悲鳴をあげる者、怒ってどなる者、謝る者とわずらわしかったが、まだ帰国の夢があるので、皆の気持ちにゆとりがあった。

外から戸が締められ囚人と同様の扱いで、わずかに車内の上隅に二か所、鉄格子のはめられた小さな窓があるだけで昼でも暗い中に、だまされることも知らず、勝手に帰国の夢を見ている関東軍の兵（つわもの）たちでした。

朝、ソ連兵が外から戸を開けるのを待つて、我れ先にと飛びおりて大便を済ませる、短時間なので人目をはばかり余裕がない、仕方なくところ構わず不様な格好をさらさなければならぬ。たまに線路の枕木の積んである陰で済ませているものなら、ソ連兵が銃で枕木をたたいて「ビストラ、ビストラ（早く、早く）」と言う。食事は四分がゆ程度のかゆに、小さな肉切れが一個くらい入って、塩味のものが飯盒のふたに六分目ぐらいが一食で、食べ盛りの私たちには辛うじて命をつなぐ程度であるから、何か食べ物が欲しくなる。貨車は一晩中走ったかと思うと、二日もとまるように気まぐれで、帰国を急ぐ私たちの気持ちとは裏腹である。

朝の貨車の影からみると北に進んでいるように思われる。ソ連兵もなれたせいとか、前よりはうるさくない。空腹に耐えられずソ連兵の隙を見て私物の石けんや手拭いを持ち出し、満人と食べ物を交換する。満人は足もとを見てか、品物と相当の食べ物をなかなかくれようとしぬ。貨車に戻るそぶりをみせると慌てて取り

引きに応じてくる。このようにして不定期な貨車旅行が続いた。

十一月二日と覚えているが、夜中に貨車がとまった。いつものことと気にせずにいると、外が何やら騒がしい。やがて戸が開けられ装具を持っておりるようになると言われた。

広い原っぱに取り残されたように貨車の列が黒く星明かりで見え、列の前と後ろがやみに溶けて視界から消えている。震えるような寒さだ。足踏みしながら一時間も待たされたか。寒さが骨の髄まで達したと思われるころソ連兵の案内で歩き出した。

このときが私たちの生と死の運命の分かれ目であったことが後日わかった。

ハタブラクに行つた半数以上の人がシラミの媒介する伝染病で帰国の夢を閉ざされたという。運命は私たちを生の方角に歩かせたのである。しばらく歩くと、街の灯が見える。近づくに従い温かそうな室内から窓を透して、久しく離れていた家族とのだんらんがうらやましく感じられる。町に入ると入浴させるといふ。

にわかつくりの浴場には脱衣所もなく、十人くらいずつ屋外で裸になり震えながら湯煙の部屋に入る。小さな湯おけ一杯のぬるま湯で体を洗い、出てくると蒸気で滅菌（シラミ殺し）された肌着を着るのだが、乾燥が悪いので湿ったのを着なければならぬので、湯上りがなお寒い。震えながら、全員が終わるまでさんざん待たされて案内された宿舎は、初めて見る半地下の丸太づくりの、何かの倉庫を急いで改造したのだろう。電線からソケットなしで直接ハンダづけした裸電球が五、六個つるしてあり、床は土間、それに製材したばかりの荒板でつくった粗末な二段ベットが将校を除いた人数分準備されていた。

れんがでつくったベーチカが三か所にあつて半地下のせいか案外暖かい。

野沢大隊長以下二百人くらい、ソダトエという小さな町に連れて来られたのだ。翌朝は十一月三日の明治節なので野沢大隊長の「遙かに皇居を拝し奉り最敬礼」の号令で東に向かつて皇居を遙拝する。正月は家で迎えることを信じて子供たちが「もう幾つ寝るとお正月」

と楽しみにするように待っていた。

二、三日は四、五人で私たちの暖を取るベーチカのまき切りくらいの作業でしたが、四日目あたりから町の小仕事に引き出されるようになり、やがては伐採、建築などの重労働を強制され、粗食と厳寒に苦しまされるようになった。ひどいときは脱穀したばかりで精白もしないアワを炊いたものを二日も食わされた。空腹に堪えられず食べたが、あごが疲れるほどかんでもいくらかも消化されず、そのまま翌日は便となつて出た。そればかりでなく便秘のために空き地（当時便所がなかった）の雪の上が無消化の便のほかに点々と鮮血で染まっていた。

「今日も難産だった」と寒いところで便秘で苦しんだ者が震えながら入つて来る。

粗食と強制労働と寒さのために……と、それ以上に帰国とだまされて連れて来られたことが私たちの体と神経をむしばんでいた。

空腹は日ごとにひどくなり、便所のそばだろうが馬の糞の中であろうが、食えるものがあれば奪い合つて

食べた。中には友人のものまで取って食べるような餓鬼道に陥った者も出てきた。同じ境遇の中にいるすべての者は、濃淡はあれ、みんな餓鬼と化して、人間の悪い底辺をさらけ出す。体がむくみ、下痢、やせて皮膚が荒れ、これが栄養失調の順序で、飢えと疲労で倒れ、苦痛を感じる神経さえも失われ、眠るように死んでゆく。

たまにソ連軍医の診断があつたが、額に手を当てて「チンピラトールニャート（熱がない）」後ろを向かせ肉の多い臀部にさわり「ミアサムノーガ（肉が多い）」「ハラショー（上等）」と言つて作業に出される。四十度に近い熱がなければ到底作業を休むことは許されない。頼れる者のいないシベリアの地では、何もかも自分で身を守らねばならない、ごみ捨て場から動物の骨を拾ひ収容所のペーチカで真っ黒に焼き、粉にして飲む。これが私たちの手に得られる下痢の最高の特效薬であつた。運よく特效薬で下痢がとまれば幸いであるが、とまらなければ体が衰弱してやがては眠るように死んでゆく。東北の人ではなかつたが、私の隣にい

た人が夜知らぬ間に死んでいた。枕を並べていた彼に最後のお世話も許されず、追い出されるように作業に出され、帰って見ると、遺体はどこに運ばれたのか、手際よく片づけられて、荒板の寝場所が一人分空いていた。

私の抑留前後

新潟県 白鳥 侃 児

昭和十四年十二月、現役兵として私は郷里新潟県新発田歩兵連隊へ入営。中支戦線で、宜昌、長沙、江北、江南作戦等に参加後帰還。（十八年九月）十九年五月新京の兄の友人福平実さんの世話で孟家屯（南新の次の駅）の満州第三七六部隊（関東軍経理部新京第一出張所）へ雇員として就職、単身内地より赴任、自動車整備工場で部品の出納や修理の手伝い等をやる。

二十年五月郷里の母が亡くなり、兄が葬儀に帰国した際、私の嫁としてつい子を連れて帰郷。つい子はし